論文

境界に生きる日本人女性たち
——米軍基地をめぐるつきあいのかたち

宮西香穂里

「皆同じだと思う。最後は皆同じところにいきつく」
（米軍兵士の妻・美樹の言葉）

1　はじめに

……黒人は連れて歩いて目立つのはいいわね。でも，やっぱりアレよ，セックスがいいのよォ。そんな大っきいとかじゃなくて，たくましいの，フフフ。それと，抱きしめられた時の体臭も好き（『週刊大衆』1991年10月21日，28頁）。

これは，マスコミによる米軍兵士と日本人女性との交際の記事の一部である。上記のように米軍兵士と日本人女性とのつきあいは，女性の過激な言葉を巧みに織りまぜながら性的な視点のみが強調されて描かれてきた。特に，アフリカ系アメリカ人米軍兵士と日本人女性との交際の記事ではそのような傾向が強い。

また，その交際は米軍兵士が異動になって日本を離れれば，終わると考えられていた。次の引用からもわかるように，それは一時的なつきあいだとみなされていたのである。

……いま，大和撫子の腰は上がった。米兵と肩を並べて歩いていても決して見劣りしない。その若い兵士たちは，彼女たちにかしずき，“騎士”として彼女たちの手をとる。しかし，彼女たちの「夢」がさめるのも早い。はしかにかかっても必ず治るように。基地という名の外国が存在する限り，このゲームは繰り返されるのだろう。ヨコスカという町で今日も「バンジージャンプ」が試されている（『VIEWS』1994年２月９日，15頁）。

私は，2001年11月から横須賀市汐入町に文化人類学的な調査のため約１年間滞在していた。住んでいたのは横須賀米海軍基地[1)]へ自転車で５分ほどのところにあるアパートだった。滞在期間中，家の近くの通りやスーパーなどで米軍兵士と歩く日本人女性の姿をたびたび目にしていた。研究テーマは，横須賀米海軍男性と結婚した日本人妻であったため，米軍兵士と交際中の日本人女性に直接インタビューすることはなかった。しかし，日本人妻とのインタビューから米軍兵士との出会いやその交際や結婚までの過程について様々なこと

MIYANISHI Kaori　日本学術振興会特別研究員

を聞いた。そして，日本人女性が米軍兵士と交際することの意味を考えてきた。インタビューを通じて，かつてマスコミから取材を受けた日本人女性にも会った。上記のような一方的な見方に対して，日本人妻たちの多くが腹立たしく感じていた。

在日米軍兵士と日本人女性の関係について，人々の頭に浮かぶ一般的なイメージは二つある。一つは，沖縄の米軍基地などで報道されたような米兵によるレイプ事件から，「被害者としての日本人女性」というイメージである。もう一つは，米軍兵士にクラブ（ディスコ）や基地前のゲートで群がるセックスに夢中の「外人好きの尻軽女」のイメージである[2)]。しかし，これらはどちらもマスコミが生みだしたイメージであって，米軍兵士との交際がどのようなものなのか，さらに当事者である日本人女性がどのような思いを抱いていたのかを知る人は少ない。そこで，本稿では日本人妻が，いかに当時米軍兵士とつきあっていたのかという語りから，日本人女性は何を感じ，考えてきたのか，またどのように出会い，交際をしてきたのかを紹介したい。さらに，米軍兵士と交際し結婚した日本人妻の過去から現在までの語りから，いかに彼女たちが妻としての立場を考えているのかを見ていく。それこそが，ここで言う「境界に生きる」ということの意味を考察することにつながるからである。

米軍兵士と日本人女性との交際についての研究はまた，コンタクト・ゾーンの分析に寄与することになろう。というのも，コンタクト・ゾーンとは典型的には植民地状況における宗主国の文化と植民地の文化との接触であり，そこには権力関係が認められる。植民地状況とはかなり異なるにしても，米兵と基地周辺の住民との関係はこうした植民地状況を喚起するものである。実際，基地をめぐる法律や国際政治の文脈においては，占領時代からのアメリカ合衆国と日本との力関係が色濃く認められる。だが，個人的な関係においてはどうだろうか。そこにはマクロな次元における権力が作用しているかもしれない。しかし，それだけではないのではないか。本稿では，米軍兵士とつきあう女性のイメージを批判的に考察することで現代日本のコンタクト・ゾーンである基地の街に見る男女関係に迫りたい。

2　米軍兵士との出会いの実態

日本人女性と米軍兵士との出会いのかたちは様々である。年齢も出身地も夫のエスニシティも異なる，紹介を通じて会うことのできた日本人妻は，40名という限られた人数ではあったが，夫との出会いを大きく五つに分類できた。1）クラブ（ディスコ）やバー（40％），2）人からの紹介（27.5％），3）海外での出会い（5％），4）職場での出会い（5％），5）その他（22.5％）であった。ここで指摘しておきたいことは，マスコミなどの報道の前提となっていた，クラブ（ディスコ）での出会いは40％にとどまり，その他の出会いが半分以上を占めるということである。ここでは取り上げないが，友人がすでに米軍兵士と結婚していたことから紹介を受けた出会い（人からの紹介），ハワイの大学院に留学していて夫と同じクラスをとっていたことから結婚に結びついた出会い（海外での出会い），基地内の部署で働いていた二人が同じ委員会に入ったことから知り合い結婚に至

った出会い（職場での出会い）や結婚相談所や教会を通じて知り合った事例（その他）など多種多様であることを強調しておきたい。以下，マスコミが好んで取り上げてきた，クラブでの出会いを紹介し，マスコミによる記述がいかに偏見に満ちたものであるのか示したい。

2－1　A クラブ

まず，A クラブでの出会いを紹介したい。Club Alliance，通称 A クラブは，横須賀基地のメインゲートを入るとすぐ左手に位置している，三階建ての建物である（写真１）。ここは，下士官専用のクラブである。階ごとにかかる音楽が異なっている。週末，特に空母キティ・ホーク（2008年５月退役）が停泊している時は込み合う。日本人女性を含む外部の人間が入るためにはエスコートが必要となる。ゲートを入る前のすぐ手前にあるパス・オフィスに基地関係者と一緒に行き，書類に必要事項を書き込み，身分証明書（運転免許証，保険証やパスポートなど）を提示すると，時間制限のあるパスをもらえる。しかし，警備が甘かった昔はゲート前に座って，通りがかりの軍人に頼めば，書類の手続きなしでゲートを通過できたという。

写真１　A クラブ

美香は，1989年に A クラブで夫と出会い，1992年に結婚した。当時，彼女が23歳で夫は22歳だった。夫はアフリカ系アメリカ人，海上勤務の士官で横須賀基地に住む。

美香（30代後半・東京）

> 1989年３月11日横須賀の基地。彼はまだオフィサー〔士官〕ではなくエンリスティッド〔下士官〕だったので A クラブに友達と行った。その時に話しかけられた。……日本でいうナンパだね。座って友達と話をしている時，何かドリンクを飲みますかって聞かれた。ぱっと見てタイプだった。感じがいいなと思った。日本でも言うけど，一瞬赤い糸がつながっていると思った。……少ししてドリンクをもってきてくれてダンスをしたりした。

彼女は当時の交際を次のように語っている。

> 横須賀まで２時間かけて毎週末会いに行った。普通は同棲するけれど，しなかった。土曜日のお昼くらいに横浜の町を歩いたり，ご飯を食べて A クラブに行って，横須賀のホテルをとって宿泊したり，日曜日はまたお昼ぐらいまでいてベースの中をふらふらして帰ってくるというパターン。４ヶ月船が出ていたこともあった。ほぼ毎日書いているんじゃないかというぐらい，手紙が来ていた。来ない時は，１，２週間来な

い。まとめて来ることもある。郵便の状況で。ポート〔港〕に着くと必ず電話がかかってきたわ。

彼女は，その当時東京の八王子に住んでいた。昼間は多摩にあるレンタル・ビデオ屋で働いて，夜は渋谷でアルバイトをしていた。若い独身の米軍兵士（下士官）は，狭い船の中に何人かで住まなければならない。その生活が嫌なので，日本人の彼女ができたら一緒に部屋を借りて同棲するカップルが多い中，彼女はそれを選択せずに2時間かけて横須賀まで通った。そして，1990年になって彼はアメリカに帰ることになった。そこで彼女はプロポーズを東京の多摩にある米軍のリクリエーション・センターである，多摩ヒルズの部屋で受ける。

冷蔵庫を開けてきてと〔彼に〕言われて，ジュースを取りに冷蔵庫を開けた時に指輪のケースが入っていたという感じ。〔指輪は〕冷えてました。ダイヤがついている婚約指輪だけをもらった。まあ，〔感動して〕ぼろぼろという感じ。1ヶ月半くらい後に彼は〔アメリカに〕帰った。成田まで送った。

それから2年間の遠距離恋愛が始まる。すぐに結婚を決心してアメリカについて行く日本人女性が多い中，彼女は婚約だけをして彼との遠距離恋愛を選択している。

2年間長距離恋愛だった。〔西海岸のメキシコとの国境に近い米海軍の町〕サンディエゴに彼は行った。湾岸戦争にも行ったりとかした。その時はメールがなかったので，電話は2週間にいっぺんの，金曜日の決まった時間。それと手紙。公衆電話に電話をする。その間に1回だけ会いに行った。サンディエゴに行った。親に会わせたいということで彼の両親に会いに行った。ニューヨークに住んでいました。92年4月24日に入籍した。サンディエゴで。

美香の事例は，2年間の遠距離恋愛を含めて約3年間の交際期間を経て結婚している。比較的長い交際期間だが，出航中は手紙や電話などによって理解を深め，結婚に至っている。ただ，これはむしろまれな場合で，通常は，出会って同棲を始めてまだ間もないころ，軍人男性の日本勤務が終わりアメリカに戻る際に，結婚を決意して一緒にアメリカに渡るというケースが多い。

2－2　ハンチ[3)]

次に，ドブ板通りにある歓楽街，通称ハンチにあるバーや小規模なクラブでの出会いを紹介したい。この歓楽街の所在地が本町（ほんちょう）であり，この本町を米軍人が発音すると，「ハンチ」と聞こえるため，ハンチと呼ぶ日本人女性が多い。

1970年代の円安時は，軍人は，基地内のクラブで遊ぶよりも基地外のハンチに出て遊ぶことが多かった。現在は，ドルが弱くなり基地内のほうが安いため軍人は基地の外にはあ

まり出てこない。そのため，ハンチには以前の盛況ぶりは見られない。しかし，夜になると日本人女性と米軍兵士の姿は絶えない。次の事例は，幸子の出会いである。幸子は当時22歳，夫は32歳。夫は，幸子に会った時にはアメリカ人の奥さんと離婚したばかりで落ち込んでいた。1994年に出会い約１年間の交際期間を経て，1995年に結婚した。夫はヒスパニック系で海上勤務の下士官である。

幸子（20代後半・静岡[4]）

横須賀のバッファロー〔バー〕で。1994年。彼はビリヤードをしに来た。デートをしたりして１年くらいして結婚した。……最初に飲み物をおごってもらって明日会える？という感じ。何度か会って……という感じ。旦那さんは当時の空母インディ〔空母インディペンデンス〕に乗っていたので，何ヶ月かいなくなっていた。初めて会って，３ヶ月か４ヶ月たって船が出ていかなければならなかった。その間手紙でやり取りしながら。……彼は離婚して傷心の時だった。軍に入る前に離婚していた。ナンパしに来ていたわけではなかった。彼はびびびっと来たらしい。まじめなところに惹かれた。……出会って４ヶ月後くらいに結婚しようかという話が出ていた。

２－３　横浜や六本木のクラブ（ディスコ）

日本での生活やＡクラブやハンチのバーにも慣れてくると，軍人の中には週末になると横浜や六本木までくりだす人が多い（写真２）。インタビューから，1980年代がクラブの全盛期だったということがわかった[5]。現在でも尻軽で外人好きの日本人女性が外人（米軍兵士）とクラブで知り合って結婚しているというステレオタイプが残っている。ここでは，彼女たち自身がその当時の経験をどのように語るのかということに注目したい。

写真２　ドブ板通りのバー

最初の事例，麻実は下町育ちの日本人女性で，外国人と話す機会などまったくなかった。夫はヒスパニック系で陸上勤務の下士官である。

麻実（30代後半・東京）

専門学校の卒業式のパーティで皆で六本木にある，バズディスコに行った時に，彼は一人で寂しそうにディスコに来ていた。東京の六本木にある *Star and Stripes*〔国防総省発行の日刊新聞〕に派遣されていた。言葉はほとんどできない。ダンスをしようと言われたが，英語はわからないし，東京でも下町育ちだから，アメリカ人というのをあまり見たことない。外人イコール遊び人という感覚があった。興味はあった。……英語が少しできる子がいて，皆でダンスしようということになった。彼は，私を誘ったのに皆が来てキョトンとしていた。彼も女の子ばっかりで気をよくして，ニュー山王ホテル〔米軍施設で港区南麻布にある米軍施設で，一般の日本人は入れない〕で

朝食を皆にご馳走してくれた。言葉は通じなくてもいい人だなと思った。

麻実は彼の電話番号を聞いたが自分の電話番号は教えなかった。後日，他の女の子と一緒に六本木から電話をかけて，彼を喫茶店に呼び出した。他の女の子は気を利かして出て行った。こうしてデートが始まった。最初のころは言葉がお互いにできないので意思疎通がなかなかうまくできない人が多い。彼女の場合も同様でデートの様子を次のように語っている。

メモと絵を書いて話をした。絵を専門学校で習っていたので絵を書いて会話をした。原宿とか渋谷とか基地内〔横須賀や座間〕でのデートをした。基地がここにあることも知らなかったので，何もかも新鮮で新しくて興味が湧いてきて楽しかった。

日本人女性の親の中には米軍に対して非常に悪い印象をもっている場合があり，交際中に反対される日本人女性もいたが（後述），彼女の両親は比較的よい印象をもっていた。

結婚しようとした日本人男性がいたけど，あまり私が楽しそうではなかったのを父親は知っていた。これに対し，今度は楽しそうだなと思ったみたい。お母さんは，戦争を体験しているので，横浜に嫁いだお姉さんもいるので，横須賀のこともPX〔基地の物品販売店〕とかをよく知ってて，アメリカ人と結婚するんだったら軍人のほうが安定している，というように他のアメリカ人よりも軍人との結婚のほうを賛成していた。……アメリカ軍に対するイメージがよかった。

軍人は3年ごとに異動するため，異動の際に結婚の決断をする日本人女性は多い。

サンディエゴに異動の時に，結婚しようと言われた。とても迷った。寸前になって決心したので，フィアンセ・ビザを申請して，6ヶ月後に会った。税関のところで，3ヶ月間くらい猶予があるので，皆に，すぐに籍を入れないほうがいいし，皆失敗しているからと言われたけど，少しだけ住んですぐにテキサスで結婚した。彼はカトリックで，私は無宗教なので教会には入れなかった。神父さんにお金を払って自宅に呼んで，日本から自分で持っていった中古のウェディングドレスを着て，彼の家族だけのパーティをした。教会では写真だけ撮らせてくれた。〔私の〕お父さんが，よろしくという文を途中まで書いた手紙が〔父の〕引き出しの中にしまってあるのを見た。〔私の〕両親は彼のお母さんに会ったことは一度もない。

麻実の事例から，マスコミをにぎわせたような，外国人好きの「特殊な」女性という印象は生まれない。そこには，言葉もできないけれど，お互いを理解しようと懸命になっている姿が見える。

美樹は，1987年に夫と出会い，1988年に結婚した。当時，美樹は27歳で夫は28歳だった。

夫は，アフリカ系アメリカ人の下士官で，現在は退役して基地内のある部署で働いている。

美樹（40代前半・神奈川）

1987年12月に横浜のサーカス〔クラブ〕で知り合った。旦那は28歳，私が27歳。クラブへ踊りに行っていた。私は毎週週末に行っていた。むこうは私が誘ったと言っているけど，私は彼の視線に気がついた。〔彼は〕お前が見ていたと〔言う〕。それで話してダンスしようと。お互いに意識した。クラブにいる間にダンスしたりドリンクを飲んだり。……電話番号を聞かれた。次の日に電話があって，毎日電話をかけてくれた。次の週末にデートをした。それから毎週会うようになった。……〔私は〕プータローだった。最初のデートは東京に行った。東京の赤坂のキュー〔クラブ〕。彼はもともとサーカスが好きじゃなかったので。クラブは場所によって違う。サーカスは子ども向き。キューは，私たちとぴったし合う。かかっている音楽もいい。もっと踊りやすい。日本のディスコとは違う。本当に黒人が踊る。そっちが好き。プロポーズの言葉は会ってすぐに言われた。僕がプロポーズしたら何て言うって。あっ，この人〔プロポーズ〕するなと思った。1988年の５月に言われた。結婚してくれますかと。

５月にプロポーズされてすぐに夫の船（揚陸指揮艦ブルーリッジ）が出航した。船が７月に戻ってきてから美樹はグアムで結婚した。

以上の事例から，出会いにはそれぞれのストーリーがあることがわかる。障害を克服して結婚に至る過程には，女性だけでなく男性側の誠実さや協力というものも見えてきた。外国人とのセックスに狂っているという日本人女性のステレオタイプに対応しているのは，女を性欲のはけ口としか見ていないという米軍兵士側に対するステレオタイプである。本節では両者のステレオタイプの是正を試みた。もちろん，ステレオタイプがまったく当てはまらない，というのではない。まず，インタビュー相手はすでに結婚した女性であり，その内容も夫との交際だったので，たとえ彼女が世間からは尻軽女と見られるような行動をとっていたとしても，夫以外の人とのつきあいの話を躊躇したと推察することもできるからだ。さらに，結婚に至らなかった女性についてはまったく対象外になっている。そのような女性の中にはマスコミ報道に近い女性もいたかもしれない。このような留保はあるにしても，つきあいには，それぞれの思いが込められていることを本章で示すことができたと思う。

3　日本人女性が直面する諸問題

本章では日本人女性が米軍兵士と日本社会で交際することから生じる様々な現実を四つに分けて紹介したい。それらをまず列挙すると，１）軍人との交際から生じる問題，２）アメリカ人との交際から生じる問題，３）日本社会の偏見と衝突，４）家族との衝突である。

3－1　軍人との交際[6)]

海軍には，陸上勤務と海上勤務の大きく二つの勤務形態がある。その勤務形態は，約3年ごとにシフトする。ただし，職種や階級によって少し異なる。日本人女性が米海軍男性と交際する際に，一つの大きな問題となるのは，男性が海上勤務で船が出港した後の生活である。空母などは長いクルーズになると，6ヶ月もの間離れて暮らすことになる。現在は，電子メールや携帯電話などの普及で連絡はとりやすくなったが，これまでは手紙や小包しか連絡の方法がなかった。そのため，船が出た後は，船が寄港した際に，米軍兵士から女性に電話で連絡をするなど，日本人女性からの手段はなく受身の姿勢しか残されていなかった。船が戻ってきても，相手から連絡がなければ，女性は友人など知り合いのつてを通じて連絡をとるしかない。彼が戻ってきても逃げられたかもしれないのだ。これは女性にとって非常に不安なことではないだろうか[7)]。以下，由香里が交際中の不安を語った。

由香里（30代前半・神奈川），夫は白人・下士官

> ただ困ったなと思ったのは，コミュニケーションがとれなくなることがある。連絡を待つ〔しかない〕ということだった。携帯電話がなかった時代だし。船で戻ってきても，こいつとは終わりだと思えば，帰ってきても何の連絡もないし。そういう不安もあった。ある意味受身。もどかしい。帰ってきたら電話くれるのかな〔という不安〕。こっちが電話してもつながらないし。

ただ，このような軍人の生活スタイルを単に交際の妨げとして捉えるのではなく，一定期間の間，離れて生活することによりお互いの仲がかえって親密になったり，良い刺激となったりすることや自由な時間をお互いに持つことができてよかったという日本人女性も数多くいたことを強調したい[8)]。私は日本人女性の一人から，船から送られてきたたくさんの手紙を読ませてもらった。そこには，お互いにお互いのことを気遣い，想い合う姿が見られた。彼女は，結婚した今でもその手紙を大事にとってある。

3－2　アメリカ人との交際

日本人女性が米軍兵士と交際する際に大きな問題となるのは，言葉の問題である。日本人女性の中には英語がまったくできないため，誤解が生じたり，お互いに辞書を持参してデートをした場合もあった。しかし，相手と意思疎通を円滑にしたいという思いから，苦手だった英語を克服するという女性の姿も多く見られた。一方，男性側にも多数ではないが，ひらがなから勉強するという姿勢も見られた。美樹は，英語がわからないので友達を通してお互いに電話番号を交換して交際が始まった。また，前述の由香里は英語ができないので，コミュニケーションをとれず，もどかしい思いをしたので英語を必死に習得した話をした。

由香里

> ……沖縄にダイビングしに行った時にビーチに外人がいた。フレンドリーに話しかけ

たら，厚木の航空基地のシビリアン〔基地内で働く民間人のアメリカ人〕の白人男性だった。その人には興味はなかったが，そこから厚木に基地があることを知った。オープンベース〔基地開放日〕に厚木に行った。そのころは英語もできず何か言われたら，うんうんだけで，バカ扱いされた。お人形さんみたいだった。悔しいことがたくさんあった。だから英語の勉強をした。この人と仲良くなりたくても電話が来なくて，納得いかなくても相手にその気持ちが通じない。もどかしい。小学校からの友達は，その時知り合って〔た人と〕結婚した。彼女から言われたのは，彼女の彼からの話で，私の英語は教科書どおりだと。生きた英語は違うんだ。get，have，make ができれば通じるんだよって言われて，バカにされて，とてもショックだった。もっとコミュニケーションとりたいと思った。会社のバイリンガルの友達に教えてもらった。ベルリッツなどの英会話の学校にも行った。結婚するまでずっと通っていた。そのうちだんだんわかるようになった。過去完了形がまだ使えない。夫は何もしない人だから〔自分が〕成長した。

英語を習得しようと努力する日本人女性は多い。また，英語に興味があったので，交際が始まったかもしれないと話す女性もいた[9)]。結婚すると英語の問題はさらに深刻になる[10)]。特に，それは子どもが生まれた後，顕著となる。子どもとの会話や学校でアメリカ人の先生との面談など，日本人女性が英語を話すことが増えてくるからである。ただ，学習意欲はあるが，交際中に英語の問題を深刻に考える女性は少ないように感じた。また，文化的差異については結婚後に，特に子育てや夫婦生活について問題になることがわかった。

3－3　日本社会からの偏見と衝突[11)]

前述したイメージの一つである「外人に群がる尻軽女」のイメージは，アフリカ系アメリカ人米軍兵士とつきあう日本人女性と主に結びつけられている[12)]。それは結婚後も彼女たちにつきまとうイメージであり，偏見である。

前述した美樹に，夫がアフリカ系アメリカ人だということで嫌な経験をしたことはあるのかという質問をしたところ，次のような答えが返ってきた。

美樹

あるよ。日本で。日本が一番多いよ。他の国ではなかった。上から下まで見る。おばさん。若い人はやらない。50歳以上。私が見られるのは平気。子どもがそういう目で見られるのが腹が立つ。たぶん，あの目の見方は，またあの子は，という見方。また黒人と結婚して，というような親しみのない目。軽蔑の目。目つきでわかる。……屋台が出てたの。〔市内の〕三笠銀座のところに。その時ちょうどクリスマスだったの。やきとりをちょうど買いに行ったの。その屋台のおじさんが，クリスマスにね，プレゼントもらった？と聞いたの。それでね，私が，うん，もらったーって言ったら，そのじじいがね。ね，いい，下品だよ。でも，これ本当のことだから。〔左手の親指と人差し指をくっつけ円をつくり，右手の人差し指をその円の間に入れる性交を意味す

るジェスチャーをした〕。いらないよ，もう。やきとりなんか。何か完全に軽蔑されてる。横に旦那はいた。もし，日本人と一緒にいたらそういうことやらないでしょ。夫はそれを見ていた。そしたら，そのじじい出てきたのね。私と喧嘩しようとするわけ。彼〔夫〕は私の真前に立って，他の屋台のおじさんがやめなよ，あんた，やめなよって。50歳以上のおじさんだった。みんな，それくらいの人。ああいう，屋台の人ってそういう人も多いでしょう。警察ざたになったらやっぱり日本人をよく〔味方〕するでしょ。それは〔ショックになって〕残った。結婚したその年のクリスマス。その日一日気分が憂鬱。ほっといてよ。売ってくれればいいじゃん。そんなこと言う必要ないじゃん。完全に嫌いなんだよね。言いたくてしょうがなかったんじゃないの。

美樹は，穏やかに話してくれていたこれまでの口調から一転して，厳しい口調と表情で私に話した。彼女はさらにいくつかの事例を挙げてくれた。一つは不動産屋ではアフリカ系アメリカ人に家を貸すのが嫌がられているということである。理由は，パーティをして騒ぐからしい。また基地内を走るベースタクシーの日本人運転手からは旦那がアフリカ系アメリカ人だと知ると，複数の運転手から彼が正月に他の女のところに行ってたのじゃないかと聞かれたという。アフリカ系アメリカ人と結婚してもすぐに捨てられる，そういう目で見られているのだ。

日本人社会からだけではなく，アメリカ人による偏見についても美樹は話してくれた。

白人にも言われたことがあるよ。つきあっているのが黒人だと，お前の脳みそ空っぽ。やっぱりなんていうのか，やきもちみたいな，何で日本人の女って黒人にいくんだろうっていう偏見をもっている人っているよね。だから，あの女はブラックにつく女だから駄目だとか。平均的に見て〔ブスが〕多いんじゃないですか。黒人の人はぽんぽんが好き。彼らは太目な人が好き。だからそれを日本人の男の人が見ると，あれ，太りすぎだってなってしまう。感覚違うんだからって。いいじゃない。日本人の男の子とデートせずに，ここにきてアメリカ人男性とデートしている子のことを，ただでかいものが好きなのかとか。そうかもしれないんじゃない。それも感覚の違いじゃない。……『ここがへんだよ日本人』という番組でも腹が立ってくる。そういう感覚で見られていることもわかっている。もっとみんなが違った見方で見てくれると楽に住める。特にケンタッキーなんか。むこうに行ったら行ったでありますよ。むこうは嫌いなら嫌いという目で見るところがあるし。日本のほうが住みやすいですよ，むこうの田舎よりも。田舎ではなかったらもっと違う感覚で。

状況は白人と結婚した場合も変わらない。孝子は次のような結婚後の経験を語ってくれた。

孝子（30代前半・東京），夫は白人・下士官

終戦50周年の時にダイエーのところを主人と一緒に歩いていたら，日本人の年配の男

性につばをひっかけられた。〔こんなことが〕何回もある。汚いって言われたり。私の子どもを見て混血児だとか。私に言わないで子どもに言う。そういうことが何回かあった時に，ナショナリティは日本人だけど，ずっと先祖をたどれば中国人かもしれないし，ピュアな日本人ってないわけじゃない。だから，おもしろいなと思った。私が外国人と結婚せずに日本人と結婚したら子どもは日本人なんでしょ。だから，そうしたらそういうこと言われないんでしょ。だからおもしろいなーと思った。ただ，子どもに言うのは，許せないけど。おもしろいなーと思った。いろんな人がいるんだと。自分は普通だと思っていたけど，そういうふうに思っているんだけど，いろんな考えの人がいて見ているんだなと思った。だから，あなたの論文を見てその人たちの育ってきた環境，価値観によって，あなたの論文も違うでしょ，受け方が。だから，その人なりに見ればいいんじゃないの。批判をもつ人はその人の価値観で言っているわけだし，いろんな人がいていいんじゃない。そう，いろんな人がいていいのよ。全部が同じだったらつまんないんだし。いいじゃない。いいのよ。……つばをかけられた。わざと。こんなところを通りやがって。びっくりした。今までこのかた，人に指をさされることもないし，ない，ない，もちろん。つばもかけられたことない。あー，この人から見るとこういう状況にいるんだと思った。旦那さんはびっくりしていた。つばをかけられたときは彼もいた。こんなとこ歩きやがってと言われた。……不快だなーと思った。もちろん，かからなかったけど，道路に落ちたけど。……旦那さんに，今日はね，日本とアメリカが戦争して終戦して50年たって終戦記念日だし，メモリアルだし，そういうふうに感情的になっている人もいるんだね。でも，あの人がつばをかけるのは，そういうふうにつばをかけるのは，だって私たちが戦争を起こしたわけじゃないじゃない。でしょ，私がやったわけじゃないし，もちろん彼が，アメリカっていう国籍だけで，ま，外見もそうだけど。だから，ね，あーんとどうすればいいのって思っちゃう，ごめんなさいと言えばいいのって。でも，私たち悪いことしたわけじゃないので，ごめんなさいって言う必要ないよねーと。

旦那さんは，追いかけて行こうとしたけどとめた。当たり前じゃない。つばかけられたんだよ。行こうとしてやめてって。むこうは英語のあなたが言ってもわかんないだろうし。その時も言わなかった。訳せって言ったけど，相手が言った言葉。訳すに訳せなかった。でも怒らないように言った。やさしく。その時私が受けたショックよりは。いろんな人がいてもいいんじゃない。ただ，そのつばをはく行為だけは嫌だけど。あと，子どもに罵声や汚い言葉を言ったりとか。傷つける言葉。そういうことを言うっていうことは嫌な思いとか不快にさせようと言っているわけだから。でも，いろんな考えがあっていいんじゃないと思う。

3－4　家族からの反対

日本人女性たちは結婚を親に告げた時に，多くの人が反対を受けている。その理由には，外国人であることや米軍兵士であること，外国に将来娘が行ってしまうことへの不安など

が挙げられた。次の真樹は結婚する前に白人の夫を彼氏として両親に会わせていた。実際に結婚することを告げた時，両親は反対だった。

真樹（20代後半・神奈川），夫は白人・下士官

両親はまさか結婚するとは思わなかったみたいで，反対された。両親は二人とも自衛隊出身。母は自衛官だった。事務のほうだ。父は海上自衛隊だった。軍隊とかはよく知っていた。そういうしがらみあるところに娘を入れたくない。横須賀のような事件の多いところに行かせたくない。……子どもが将来生まれた時に自分たちとコミュニケーションをとれるのかとか。

しかし，真樹は少しずつ両親にわかってもらえるように説得した。2002年５月，６月の結婚直前まで反対されていた。「彼のいい部分を小出しにしながら，彼はこういう時はこういう人なんだよということを，どういう人なのかをわかってもらえるように話をした。やっぱり結婚するんだったらよかったね，と少なくとも両親には言ってほしかった」と真樹は述べた。真樹のように結婚に際して両親から反対されることは多い。また，アフリカ系アメリカ人男性と結婚することのほうが両親からの反対は強いということを日本人女性から聞いた。

孝子は，夫と出会った時，公務員（保母）であった。彼女の両親は，会社を経営しており，裕福な家庭だった。

孝子

〔彼との結婚は〕反対。お見合いの話をもってきたくらいだから。私も何となく話せないし，現実味がないし，恋愛は楽しいだけでそれでいいけど，結婚は別の人とするんだろなと思っていた。結婚は日本人の人と普通にするんだろうなと思っていた。お見合いもしていて，母親に聞かれて前向きという答えを相手に出していた。でも，すぐに妊娠がわかった。両親から勘当された。職場の近くに両親がもっているアパートがあって，そこに住まわせてもらっていたので別々に暮らしていた。そこから，出された。もう，すぐに。

〔私〕「実はつきあっている人がいるんだ」と言った。「一歳年下の人で船に乗っている人」。

〔母〕「漁業をやっている人？どこの人ー」。

〔私〕「横須賀の人」。

〔母〕「どういうことー」。

〔私〕「基地に勤めている人で」。まだアメリカ人とは思わない。

〔母〕「あ，そうなんだー。船をなおしている人なのー」。

〔私〕「ううん，実はそこで働いているアメリカ人の人なんだー」と。「子どもいる」。家族全員がいて食卓にみんな集まっていた。みんな，そこでシーン。……妹は絶句し

ていた。誰も言葉を発しなかった。お母さんはヒステリックになっちゃって，わあわあわあっていう感じ。母親がもう出て行きなさいと。母親はすごいショックだったんだと思う。私，すごい言うこと聞いていたから。就職するのも，いろんな勤務先があったけど，親の勧めるアパートから近いところを選んだし，ずっと親の敷いたレールに従ってきた。そして，後の親の希望，フィナーレは結婚だった。後は孫が生まれることだった。本当に最終段階にぶちっと切れたので，怒っていた。わなわなした。私もびっくりした。あっ，世間の反応ってこんなんだと思った。あっ，そういうレベルなんだ，日本は。アメリカ人だということと，ミリタリーだということ。外資系で働くアメリカ人でもびっくりだけど，ミリタリーなので，なおさら。物をおいていきなさい。鍵をおいて出なさいと言われた。窓からよじ登って中に入って貴重品だけとって，書類とか職場のものをとって出ていった。二階まで。何であんなことできたのかなと思ったけど。下に投げて，物はいいやと。で，その日は同じ職場の一緒にクラスをもっている女性で独身の人がいて，彼女に泊めてもらった。職場にもずっと行けたし，生活もずっとできたし。妹だけ連絡したけど，両親とはまったく連絡はない。妹はバックアップしてくれた。ただ，赤ちゃんできたから結婚するんじゃないのと聞かれたので，うーん，でも一応結婚してみる。駄目だったら離婚すると。生活してみる一回。仕事はそれまでやめない。結婚しました，離婚しましたで，仕事がなかったら困るので，仕事はやめなかった。そういうことを母親とかに妹が話してくれた。連絡は両親からは来なかったけど。11月にアメリカで結婚して，12月に入ってからむこうで式をあげたんだと話した。自営業の父と母の会社に行って話した。はあ，力が抜けちゃった。二人とも。手が届かないところに私が行ったみたいで。産婦人科で子どもの写真のエコーとかとるじゃない。それを見せたら，ころって変わっちゃった。それからは写真を見せたら，どうしてるの，アパートに戻ってきなさいとか。

日本人の両親は結婚には反対するが，実際子どもが生まれて孫の顔を見ると，その態度はかなり軟化する傾向がある。多くの日本人妻たちは子どもが生まれてからの親の変容に驚いていた[13]。しかし，未だに親と絶縁状態である日本人女性も多いということを聞いているので，その結婚の難しさがわかる。ちなみに40名のうち16名が反対にあっている。そのうち４名が説き伏せるのに時間がかかった。反対だったが子どもができて軟化した場合が２名ある。他10名は駆け落ちや勘当を受け，親の反対を押しきって結婚している。

4　人間として，個人として

日本人妻たちは，米軍兵士と様々なかたちで出会い，多くの偏見を受けながら困難を乗り越えてきた。彼女たちはそのような状況の中から，相手を理解し結婚まで至った女性である。彼女たちは結婚後，夫の任務によってアメリカ本土に移り住み，国内・国外を問わず基地を転々としてきた。夫の乗る船が出港すれば，一人で家庭を守ってきた（写真３）。また，子どもを育てる日本人女性は，母親としてさらに責任をもって米軍の中で強く生き

てきた。米軍兵士と出会い，結婚した日本人女性はこのような経験を通じて，自身が変化してきた。それは，より客観的に日本やアメリカ社会を見る視点を彼女たちがもつことができるようになったことである。以下，日本人妻の語りを中心に彼女たちの変化と，そこに含まれる強いメッセージについて考えてみたい。

私は，洋子に日本で生活することについて，どのように考えているのか訊ねた。すると以下のように答えた。

写真 3　再会を喜ぶ日本人妻とその夫

洋子（40代前半・千葉），夫は白人・下士官

> いいことも悪いこともはっきりいってありますけど，昔はアメリカ，アメリカって思っている時期もあったけど，今は中間の立場。その場その場でアメリカ人になったり日本人になったりとか。日本人の中にいると，めんどくさいなと思う。……〔状況を〕客観的に捉えている。

洋子は過去を振り返り，彼女が以前は日本なんかどうでもよく，アメリカのことしか考えていなかったが，米軍兵士と交際して結婚することにより，より客観的に距離をおいて両国を捉えていることがわかる。

次に，前述した40代前半の美樹に，最近のアフリカ系アメリカ人の米軍兵士と交際する日本人女性についてどう思うのか訊ねてみた。彼女も洋子と同様な視点をもっていることがわかる。

美樹

> 自分がしてきたことをこの子たちもやっているなーと思う。自分たちと同じ道を通ってきている。遊んでいる子たちも，あー，やってるなーと思っている。この子たちも私くらいの年になるとわかる時がある。もっと大きな目でわかることがある。

美樹に，若いころと比較して何が見えてきたのかという質問を続けた。

> すごいいろんなことが見えてくると思うんだけど，例えば日本は嫌い，アメリカ大好き。でも，外に出てみて日本のよさがわかる。素朴だけど日本のよさがわかる。そういうこともあるし，どこにでもいいところと悪いところがある。やっぱり外人に対しても，かっこいいだけではない。やっぱり心が優しくなければ。スタイルとか踊りだけが，そのつきあう基準。その人を見る目の基準がわかってくるでしょ。今になるともっと。20代のころは，わからなかった。かっこよければ。でもそれだけではないよ。でもみんな同じだよ。ハワイか何かに行って暮らしてて，日本人のカップルなんか来

るでしょ。日本人の男なんて嫌い。私もそうだったけど。今でも思っている人も多いと思うけど。日本人の男なんか彼氏にしたくない。でもハワイとかグアムに行って日本人のカップルを見ていると可愛いなと思う。日本人の男の子，可愛いなと思う。このカップル可愛いな。二人同じ人種で，同じ結婚して同じものを食べておいしいって言えるんだよな。そういうところが可愛いなと思う。新婚旅行で来ている人とか。同じものを食べておいしいなとか，例えば肉じゃがとか，言っているんだろうな。そういう時にね，ちょっと思ったりするの。自分が日本人と結婚してたらどうだったんだろうな。この魚うまいよね。食べてたのかな。それをちょっと想像してみたりするよね。そこにいたんじゃ，わかんなかった。遠く離れたから見えることってたくさんあると思う。それに固執しちゃっているでしょ。だから，黒人だけがかっこいい。もうかっこいいだけではすまない。結婚したら。相手の嫌な面，汚い面とか。例えば病気したときに吐いたり。子ども生む時に一緒にいたり。髪の毛がこんなんに〔白く〕なって一緒にいたり。そういうこと想像とかできていない。でもそういうことを見なきゃならない，結婚したら。それが見れないんだったら結婚できない。だから，それが全部わかっちゃうと人間全部一緒なんだよね。日本人の旦那さんだって奥さんの前でおならしているんだろうな。外人だっておならするし，同じ。だから，皆同じだと思う。最後は皆同じところにいきつく。

美樹の言葉から，最近のアフリカ系アメリカ人の米軍兵士と交際する若い日本人女性を見ながら，彼女も昔はスタイルや音楽や国籍など男性の「外側」の部分だけを見ていた若いころがあったことを認めていること，さらに相手とのつきあいや結婚生活を通して，相手の内面を見るように彼女自身が変化したことがわかる。それは同時に，洋子と同様に，日本や日本人をより客観的に捉える視点につながる。それは，ハワイやグアムに来ている日本人同士のカップルを見て，彼女が「日本人のカップルを見ていると可愛いなと思う」という言葉に端的に表れている。さらに，彼女のインタビューは，「皆同じだと思う。最後は皆同じところにいきつく」という言葉で終わっている。この言葉の意味を考えてみたい。

日本人妻には，インタビューの最後に一般の人に向けて何か一言メッセージを言ってほしいとお願いした。妻たちはここで様々な思いを語ってくれた。驚いたことに，ほとんどの妻の一言に一つの共通のメッセージを認められた。まず美穂から紹介したい。

美穂（30代前半・沖縄），夫は白人・下士官

私たちだって同じ人間なんだから，普通の日常の生活もあるし，ただたまたま軍人だった。大きな目で見てほしい。目に見える部分だけでなく，心はあるんだし偏見のある目で見てほしくない。私たちだって問題を抱えているのだから，もっと知ってほしい。軍が絡んでゆがんではいるが，アメリカの文化や軍に対する考え方，自衛隊に関してもそうだけど，軍事力をもつことは，毛嫌いするだけでなく，どういうメリットがあるのか，拒絶だけではなく大きな目で見てほしい。一人の人間として見てほしい。

個人を見てほしい。結婚する時に拒絶されたのは，個人ではなく軍というフィルターを通して判断されたから。もっと私たちがどのような生活をしているのか知ってもらえばわかってもらえるのでは。友達の中には外人と遊んで結婚したと思っている人がいた。何十年か前に報道された，外国人に群がる女たちという番組でクローズアップされたが，日本人同士でももっと軽いつきあいの人，ナンパなどはあるのに考慮されない。ただ外人だからという理由で。外国人としかつきあえない，結婚できない日本人女性だと考えられていると思うが，結婚生活はそれだけで成り立っているわけではない。

智子（20代後半・神奈川），夫は白人・士官

基地の人という感じで悪いことを言う人が多い。知らないので言っているけど，一人一人を見てほしい。偏見をやめてほしい。悪いことばっかりでいいことが流れることがない。

弘子（30代後半・東京），夫は白人・士官

軍は軍で，軍人さんという目で見られて日本人の領土を使っていて反対意見もあって問題を起こしているし，そういうふうに見られがちなんだけど，一個人，人間一人一人見てもらうと良い人がいっぱいるので，いろんな人と関わりをもってもらって理解してもらったら嬉しいなと思う。軍という単位ではなく一人一人の人間として見てほしい。

和美（20代後半・青森），夫は白人・士官

ただ軍人との結婚っていうと嫌なイメージを抱く人が多いような気がするんですよ。実際，何か私も軍人と聞くと何となく嫌な人たち，何かにつけては女の人たちと遊ぶ人たちというイメージがあったんですよ。でも，実際に結婚してみて，なんだ皆実際普通の人たちじゃんと思った。だから，最初から悪いような見方をしないでほしいなと思います。東京にいた時なんかは，英会話を習いたいと思ってて，個人がいいなと思って探してたら，やっぱあるんですよ。うちは〔先生が〕軍人の奥さんじゃないから大丈夫ですよとか。それをキャッチフレーズじゃないんですけど，私たちは外務省とか商社の奥さんだから大丈夫ですよとか。うちは，すべて例えば某有名会社の奥さんとか，奥さんはアメリカ人かもしれないけど，そのバック，日本側，その会社がそれを売りにしているというか，軍人の奥さんって嫌なのかなとか，あんまりいいイメージがしなかった。でも，実際結婚してみると，そりゃ，軍人だけど普通にねー，意味なく人をねー，軍人をすごく毛嫌いしている人とかいるので，野蛮じゃないけれどすごい嫌な意味で捉えている人がいるので，人間性〔が悪い〕とかそういうことはないし，学校だって普通に終わってきているし。変に軍人はっていう，バッシングされやすいじゃないですか，軍人っていうだけで。でも，それは日本にだって，例えば今，浮浪者を殴って殺しちゃうとか，そういうなんか見えないところに一杯いるのに，

軍人だっていうだけで大きく取り上げられるのが，違いますよ，みたいな。

真樹

軍人と結婚したから，そういう安っちい，そういうんじゃなくて軍人も一人の人間だから，そういう部分をもうちょっと，一人の人として尊重してもらえる日がくるのが一番望ましいのかなと思っています。

このように，日本人妻は，軍人としてではなく，個人を見てほしい，米軍人男性や外国人などのフィルターを通した色眼鏡で，結婚を含め，その交際や当事者である日本人女性や米軍兵士を見てほしくないという強いメッセージを発している。それは，外国人との結婚を振り返って出てきた美樹の言葉，「皆同じであると思う。最後は皆同じところにいきつく」という言葉と同じ意味ではないだろうか。誰と結婚しても人間は人間だという主張。そして，軍人やアメリカ人という人間の外側についている属性で人を見ようとする視点への強い批判である。

5 「境界に生きる」とは？

日本人妻のおかれている状況はどっちつかずの状態にある。しかし，日本人妻の中にはそれをも乗り越えようとする強い意志をもっていることが彼女たちの語りから感じた。それは，日本人女性が米軍兵士とつきあい，結婚することによって，相手を人間そのものとして見ることを学んだという主張である。そこにあるのは人間として見てほしい，人間として相手を見たいという彼女たちの意志である。私はそこにこそ，境界に生きるという真の意味を認めたい。境界に生きるとは，ある時は日本側，ある時は米軍側，さらには両方につきながら生きることを意味するのではない。そうではなく境界に生きるというのは，軍人とかアメリカ人とか日本人とかのカテゴリーで人を見るのではなく，その人自身に迫るつきあいを実践することなのだ。様々な厳しい状況に直面しながら，日本人女性は米軍兵士を一人の人間として受け入れ，そして受け入れられてきたのではなかろうか。それこそが，彼女たちにとってのコンタクト・ゾーンの生き方であると考えたい。

追記

本稿は，2003年1月に京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した修士論文［宮西 2003］の一部に基づくが，細かい事例は本稿では省いている。本稿の一部を，日本文化人類学会研究大会（2003年5月24日京都文教大学）にて報告した。本稿ではふれなかったが軍人妻をめぐる先行研究については，［宮西 2004a］で詳しく述べた。また，本稿の一部は［宮西 2008］にも含まれている。

注

1） 神奈川県には横須賀にある米海軍基地の他にも厚木米海軍飛行場やキャンプ座間などの米軍施

設がある［神奈川県企画部基地対策課　2001］。

2）　これらの二つのイメージを，島袋は，前者は，基地反対運動と連動して「保護される客体」や「暴力の結果」として，つまり米軍基地の犠牲者で，後者は，アメリカ好きな女性であり，自ら進んで米軍兵士と交際し結婚する女性（能動的な行為者）と，米軍兵士と結婚してできた「格好いいハーフ」の子どもを見せびらかせたい沖縄女性（共犯の成果）と指摘した［島袋 2002］。

3）　ドブ板通りやハンチについては［上田他編 1998］を参照。

4）　日本人妻の名前の後は，年齢と出身地を示している。

5）　1980年代後半から1990年年代最初にかけて，ハワイ，ニューヨーク，バリ，在日米軍基地や六本木に外国人との短期間の性的な関係を求めて日本人女性たちが現れた。彼女たちは「イエロー・キャブ」と呼ばれた［Kelsky 2001：134］。

6）　軍人妻として生きる日本人妻たちの結婚生活については［宮西 2004b］を参照。

7）　エンローは，兵士との結婚はストレスが多いが，米軍兵士とアジア諸国出身のガール・フレンドの結婚ほどストレスがたまるものは他にないと指摘している［エンロー 1997：69］。

8）　だが，一方でこのような姿は米軍から見ると「模範的な」ガール・フレンドと映る。エンローは，「模範的な」ガール・フレンドとは，恋人である兵士に余計なストレスをかけないように，わがままは言わず，恋人を裏切らず，帰還した時には兵士の妻になることを切望する女性であるという。そして，こういった姿勢は兵士の士気や意欲を維持し続け，軍隊を援助することになると指摘する［エンロー 1997：68］。

9）　工藤も，在日パキスタン人男性と結婚した日本人女性は，海外への興味や英語への関心が結びつきとなり交際の始まりとなっていると指摘している［工藤 2008：60-61］。

10）　語学能力がないために雇用機会が狭まってしまうことも問題である。ドイツ人とアジア人女性との結婚について研究したBregerは，語学力が欠如している外国人妻は，雇用機会だけではなく結婚生活においても不利な立場に置かれており，それは夫婦の間に将来摩擦を起こすような不均衡な権力を生み出すと指摘している［Breger 1998：145］。

11）　軍人との結婚に見られる日本社会からの偏見の一部は［宮西 2008］でも述べた。

12）　アフリカ系アメリカ人米兵と交際する日本人女性のことを「ぶら下がり族」と呼んだ。中島によると「これ〔ぶら下がり族〕は，黒人男性と連れだって六本木界隈を闊歩する日本人女性につけられた総称で，1980年代初頭，彼女たちは様々なメディアで紹介された。語源は，黒人男性に細い腕を絡ませて歩く彼女達の姿が，その巨体にぶら下がっている様に見えることからつけられた名称である」［中島 1994：70］。

13）　同様の変化は在日パキスタン人と結婚した日本人女性の両親にも見られた［工藤 2008：72］。

参考文献

上田高史・高山和雄・西野由希子・斎藤聡子・星野新一編　1998 『オルタブックス　日出づる国の米軍　米軍の秘密から基地の遊び方まで「米軍基地の歩き方」』メディアワークス。

エンロー，シンシア　1997 「女性の立場から見た外国軍事基地」（春山秀雄訳）『歴史地理教育』568：67-73。

神奈川県企画部基地対策課　2001 『神奈川の米軍基地』県民部広報県民課。

工藤正子　2008 『越境の人類学――在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』東京大学出版会。

サブカルチャー研究会編　1994 『フェンスの向こうのアメリカ探険　秘密に満ちた米軍基地を100倍楽しもう！　在日米軍基地完全マニュアル』サンドケー出版局。

島袋まりあ　2002 「沖縄の「混血児」とその母親を語る政治性」青木保他編『アジア新世紀３：アイデンティティ』岩波書店，pp. 85-100。

中島恵子　1994 「六本木と横須賀に見る黒人男性とぶら下がり族の生態は，いま…。」『噂の真相』８月号特集７，pp. 70-77。

宮西香穂里　2003 『ダブル・アウトサイダーを生きる　横須賀米海軍男性と結婚した日本人妻たちの生活誌とネットワーク形成』（京都大学大学院人間・環境学研究科　修士論文）。

――――― 2004a 「軍隊は彼女の家族なのか？――米軍人妻の実用的，制度的，生活誌的研究をめぐって」『人文学報』90：23-77。
――――― 2004b 「従軍する日本人妻――アメリカ海軍横須賀基地の事例から」青弓社編集部（編）『従軍のポリティクス』青弓社，pp. 191-214。
――――― 2008 「『トリプル・アウトサイダー』を生きる――横須賀米海軍男性と結婚した日本人妻たちの民族誌」『文化人類学』73（3）：332-352。

Breger, Rosemary 1998 Love and the Sates: Women, Mixed Marriages and the Law in Germany. In R. Breger and R. Hill eds., *Cross-cultural Marriage : Identity and Choice*. Oxford: Berg.（吉田正紀監訳『異文化結婚――境界を越える試み』，新泉社 2005）
Kelsky, Karen 2001 *Women on the Verge : Japanese Women, Western Dreams*. Durham and London: Duke University Press.